

RI D2660

東大阪東ロータリークラブ



HIGASHIOSAKA-EAST ROTARY CLUB

Club Weekly Report 2016-9-14・29 No.2497・2498

人類に
奉仕する
ロータリー

創立：昭和40(1965)年3月4日

『サービス（奉仕）に感動を』

例会場：ホテルセイリュウ 例会：毎週木曜日 12:30～ HP：<http://www.higashiosaka-eastrc.jp>

会長：芳田至弘 / 幹事：河村幸司 / 会報資料担当：寺西太一

今日の例会

- 松本 進也ガバナー公式訪問
卓話
「2016-17 年度 RI 会長テーマ及び
第2660 地区ガバナー方針」
国際ロータリー第2660 地区
ガバナー 松本 進也 様

- 今日の歌
「奉仕の理想」
ピアノ 岩島 佳子 先生

来週の例会予定 (10/6)

- 10月6日(木)
卓話「土地の価格」
勝山 巖 君

- 例会前 10 月度定例理事会

9 月は
基本的教育と識字率向上月間
ロータリーの友月間です。

先週の出席報告(9/14)

(9/8) の出席者数：33 名 (0)
先々週 (9/14) の出席者数：28 名 (1)
先週 (9/22) 公休

9/14 出席率：50.91%

会員：61 名 (免除7名)

	9/1	9/8	9/14
HC 出席	36(0)名	33(0)名	28(1)名
MU 出席	7(0)名	7(0)名	8(0)名
修正出席率	79.63%	74.07%	65.45%

会長の時間

芳田 会長

本日は松本ガバナー公式訪問です。例会前・例会時間に貴重なご意見、卓話をよろしくお願ひ致します。本年度のガバナー方針は「The ideal of service」であります。会員の皆様はガバナー月信の購読により理解を深めて下さい

9月14日は東輪会合同例会で、講話は「奉仕における神道・仏教文化とキリスト教文化の違い」について、曹洞宗・安泰寺住職ネルケ無方氏（旧西ドイツ・ベルリン生まれ）による講演がありました。会員の皆様の多数の出席ありがとうございました。

東大阪東ロータリークラブの名誉会員の、中田 武仁様（本年5月23日78歳死去）は、23年前カンボジアで選挙監視の国連ボランティア活動中に、凶弾に倒れたご子息・厚仁さん（当時25歳）の大阪市内にある大連寺の墓のすぐ隣の墓に眠っておられます。

ご子息との突然の別れは55歳の時、貿易会社を辞めて意志を引き継ぐと決断し名誉大使を引き受けられました。ご子息と同じ志のボランティア達を励まし、安全確保に心を砕き、15年間で50カ国以上訪れられました。大使就任は抜群の英語力「ミスター・ナカタに通訳は不要」と国連内部で共有されておりました。名誉大使を勇退した2008年、愛の反対語は無関心と説き、若者達にボランティア活動の扉をノックしてみてほしいと、呼びかける論文がありました。

中田 武仁様のご冥福をお祈り申し上げます。

東大阪東ロータリークラブ事務局

〒579-8012 東大阪市上石切町1-11-12 ホテルセイリュウ 302号室

TEL:072-985-0189 FAX:072-985-0577 E-mail:higashiohrc@air.ocn.ne.jp

松本 進也ガバナーのご略歴



氏名 松本 進也
(大阪北RC)
生年月日 1947年2月20日生

職業 松本商事株式会社 松本興業株式会社
松本フード株式会社 代表取締役社長

ロータリー歴

1987年 大阪北RC入会
1993～1994年度 幹事
1999～2000年度 地区拡大委員会委員
2000～2001年度 地区副代表幹事 拡大委員会委員
2001～2002年度 地区拡大委員会委員
2003～2004年度 地区幹事
2004～2005年度 地区代表幹事
2008～2009年度 会長
マルチプル・ポール・ハリス・フェロー
ベネファクター・メジャードナー
ポール・ハリス・ソサエティ
米山功労者メジャードナー

幹事報告

河村 幹事

国際ロータリー第2660地区ガバナー松本進也様、ようこそお越し頂きました。本日の卓話、どうぞ宜しくお願い致します。また、先般の東輪会合同例会にご出席の皆様、お疲れさまでございました。

《これからの予定》

- 【1】10/6 (木) 例会前、10月度定例理事会
- 【2】10/8 (土) ～10日 (月・祝) 秋のライラセミナー
- 【3】10/13 (木) 公休
- 【4】10/16 (日) 米山奨学生レクリエーション (ヨシユア, アディ エカティルタ君、広田米山奨学担当出席)

<連絡事項>

- 【1】2016-17年度地区大会の参加申込書の提出がまだの方は、至急事務局までご提出をお願い致します。
- 【2】10月18日 (火) 東大阪RC主催の東輪会ゴルフコンペの参加人数が少なく再度参加を募っております。次年度は、当クラブが東輪会のホストという事もあり、皆様ご参加・ご協力を宜しくお願い致します。



9/8 林ガバナー補佐 卓話



ガバナー補佐を迎えての第3回クラブ協議会

東輪会合同例会

2016年9月14日(水)

於：シェラトン都ホテル大阪



「奉仕における神道・仏教文化と

キリスト教文化の違い」

曹洞宗・安泰寺住職 ネルケ無方氏



[スライドにて説明]

ロータリークラブでお世話になるのは今回で3回目、ロータリークラブの存在はドイツにいる時から知っていました。ロータリークラブ寄贈の公園のベンチや植樹などを目にし、いい方の集まりだなという、ぼんやりしたイメージがありました。初めてロータリーにお世話になった時、最初の歌に驚き、異業種交流会のような感じではありますが、そこには奉仕というモットーを掲げられています。今回、実行委員長からも「奉仕とは何か」という問題意識を突き付けられ、私に聞かれても答えようがなく、逆に皆さんに聞きたいぐらいだと思った次第です。

奉仕するとはそもそも何なのか、キリスト教における奉仕の考え方、日本における神道、私は神道についてはあまり詳しくないので、仏教ではどういうふうに考えているのか、今日はそういうテーマについて話をさせていただきます。

私は今年48歳、まだ東西に分かれていた旧西ドイツ、ベルリンで生まれました。私は長男で、生まれた時に母の実家のある町に移りました。祖父は12世紀に建てられた教会で牧師をしており、赤ちゃんの時に洗礼を受けてめでたくクリスチャンになりました。祖父は本を読んでくれたり、牧師の書斎で遊ぶことが好きで、その頃から宗教哲学に縁があったのかもしれませんが。一番好きなことはお絵描き、7歳の時に私の人生が変わりました。それは母が37歳の若さで癌で亡くなったからです。小学校1年生の夏休み、1人で部屋にこもって考え事をするようになったのはその頃からです。どうせ死ぬのに何のために生きるのか、人生の意味とは何だろうと。当時、お父さんは何でも知っていると思っていたので聞いてみると、困った顔で「学校の先生に聞いてみなさい」と言われ、先生に聞いても答えてくれません。「先生も分かってないのではないだろうか」と生意気ながら思ったものです。ならば自分で考えるしかない、やがて何を考えたのか自分でも分からなくなっていました。

14歳になるとドイツでは堅信という儀式があります。赤ちゃんの時に洗礼を受けるので、もう一度自分の信仰を確かめるという儀式です。この時点で私は神様を信じることができなくなっていました。サンタさんは12月24日の晩にやってきます。ドイツのサンタ

さんは優しい一面と怖い一面があって、片手にプレゼントの入った袋、もう片手には竹箒のようなものを持っています。悪い子の尻を叩くため不安でもありました。ある時、サンタさんの顔をよく見ると隣のおじさんだということに気付いてしまって、その頃から、キリスト教の神様も本当は嘘ではないかと思っていました。ただ、堅信に参加すると親戚が集まってお祝いしてくれるので、「僕はクリスチャンだ」と言ってしまいました。クリスチャンになると日曜日のミサの途中で聖体という儀式があります。最後の晚餐を再現する儀式で、薄いパンをイエスの体だと思って頂いて、イエスの血液だと信じられている大きな杯のワインを頂きます。この儀式に参加しないと親は飲酒を許可しないので、毎週日曜日にワインを飲みたいという思いもありました。

学校でもキリスト教の授業があり、教会でも牧師からキリスト教の教義について学びました。「神を心を尽くして愛すると同時に自分と同じように隣人を愛する」という教えは、まさにキリスト教における奉仕の精神だと思います。ただ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は一神教で、自分たちは選ばれた民であるという自覚があります。そうでない民がかわいそうだから一神教の教えを説いて彼らが地獄に落ちないように改宗してもらおうという、傍から見れば自惚れのようなものも入っています。奉仕を英語でいえば service、仕えると言いつつ、奉仕する立場は高く、奉仕を受ける隣人は低い立場にいる、そういう考え方が奉仕の精神に入ってしまったままです。キリスト教は非常に厳しい宗教であると同時に自惚れみたいなものも入っています。無垢な赤ちゃんでさえ、洗礼を受けていなければ、突然死んでしまうと地獄に落ちるといふ、そういう厳しいことすら言われます。そんなことが果たしあるのだろうか、子供の時から疑問に思っていました。建前として私は堅信をしてクリスチャンになりました。

神様の物語はお伽噺にしか聞こえず、段々ひねくられていっていきけてしまいました。16歳の時、親元を離れて全寮制の高校に行きました。この高校にはたまたま座禅サークルがあって、座禅の好きな先生に入学当時に勧められましたが、興味がなかったのを断っていました。2〜3週間たって再び誘いがあり、「2回も誘うなんて怪しい。関わらない方が無難だ」と思って「僕は結構です」と断ったら、先生は「君は今までやったことがあるのか」「いいえ、やったことはないし、これからは全くやるつもりはない」と言うと、「おかしいじゃないか。一度もやってみないで何で嫌い、興味が無いと言えるんだ。」と。その理屈に騙されて今日の私がここに立っています。一度でやめるつもりでやった座禅でしたが、いつの間にかはまってしまいました。

座禅をして何が良かったかという、まず座禅をして初めて私に体があるということに気付きました。頭の脳みそが考えるためには、酸素が必要、それを体に

取り入れるのは肺の役割、それを頭まで運ぶのは心臓というポンプの仕事です。首から下を切ってしまうと頭だけを病院に運び込んで、機械につけて人工的に生かすことができれば、それでもかまわないと思っていました。ですからロダンの考える人のようなみっともない姿勢で授業を受けて、先生に「君の姿勢は悪いよ」と注意されても、「姿勢が悪くて何が悪い」と反論したと思います。姿勢が大事だという自覚が全くありませんでした。座禅をして初めて、姿勢が変わると自分が変わるという気付きがありました。静かに座ると自分の呼吸に気がきます。息を吐いて息を吸う、これも私の命、私を生かしてくれていると初めて気付きました。更に静かに座り続けると、窓の外で風が吹いたり、パラパラと雨が降ったり、小鳥が鳴いたりして、それまで気付いていなかった世界、それとつながっているという感覚を初めて覚えました。1回でやめるつもりが毎回参加していました。17歳の時に先生が定年退職されて、私に「君がサークルのリーダーとして続けてくれないか」と言われて慌てました。町の図書館に行って禅の本を借りて読みあさりました。それまで仏教とはどういう宗教なのか、禅とは何なのか、体の感覚としてはありましたが、理屈が分かっていなくて、昔のインドの經典のドイツ語訳を読んで知ったのがお釈迦様の話です。

釈迦は今から2500年前、インドで王子としてお生まれになりますが、生きることは苦しいと宮殿から飛び出して、木の下で座禅を組んで苦しみからの解放を得られたと言われています。そのお釈迦様に失礼かとは思いますが妙な親近感を覚え、私も7歳の時に母を亡くしてから、経済的に困った生活を味わったことはありませんが、どうしても生きることが不満というか、苦しいと言ったら大げさですが、何か物足りないという思いが頭から離れることなく過ごしてきたように思います。その疑問に父親も学校の先生も周りの人たちも相手にしてくれない、お釈迦様もそうだったのかという親近感です。鈴木大拙さんの本で、仏教は代々師匠から弟子へと伝わってインド中に広まり、中国をへて日本に伝わったことを知り、高校を卒業して日本に渡って禅僧になりたいという夢を持ちました。

高校を卒業してすぐに行きたいと、定年退職した先生を訪ねると、責任を感じたのか、「君の熱心な気持ちがいつまで続くか分からない。熱が冷めてドイツに帰りたくなるかもしれない。まず就職できるような資格を身に付けてから日本に渡ったらどうだ。大学に入って日本語でも勉強してからでも遅くない」と止められました。大学は4月と10月に入れます。高校を卒業するのは6月、3ヵ月間だけ日本でホームステイをしようとして学校で紹介して頂きました。栃木県宇都宮市のお宅、今から30年近く前です。そのお宅はクリスチャン、私は禅の影響を受けている日本文化全部を知りたくて、お茶、お花、柔道、合気道に興味があり、尺八も聴いてみたいと思っていました。無理をお願いして宇都宮

市にあるお寺に泊めて頂いたり、やはり座禅がしたくて京都までヒッチハイクで行きました。禅寺は沢山ありましたが、修行僧と同じような座禅修業はさせて頂けません。門前払いされても仕方なく、大学で日本語を勉強してから出直そうとベルリンに戻って大学に入りました。

ドイツの大学は入るのは簡単ですが卒業するのは難しく、修士課程を終えてマスター論文を出さないと卒業とみなされず、22歳の時には卒業には遠く、今度は留学生として京都で1年学ぶことにしました。園部市に毎月座禅をしているお寺があると聞いて夏休みもお世話になって、残りの半年は京都で学ぶべきなのか、本格的な修行すべきか悩んで、やはり修行がしたいと思って和尚さんに安泰寺を教えてくださいました。

安泰寺は兵庫県北側、山陰に近く、海岸より20kmぐらい山に入ったところに位置し、最寄りのバス停から歩いて5km、ちょうど台風直撃の後で道がありませんでした。迎えに来てくれた修行僧と山を這い上がるようにして登ったことを覚えています。住職から「君は何をしに安泰寺に来たのか」と聞かれ、「僕は仏教を学びに来ました」と言うと、「アホ、ここは学校じゃない、お前が安泰寺をつくるんだ」と、とんでもないことを言われ、22歳の留学生にどうしたら安泰寺をつくれるのか。住職が言いたかったのは、「例え半年の短い期間であっても、そこに何が見えるか、見えないかは、君の姿勢次第だ。仏の道は遠いところにあるのではなく、君の足元にある。一步踏み出すのは君自身」ということだと思えます。安泰寺の朝は3時45分の起床から始まって、4時からみんなが壁に向かって座ります。座禅は心身脱落といって自分を投げ出すのが基本です。22歳の時はそんな難しい話は知らなくて、一神教徒として育った私として疑問に思ったのは偶像の多いことでした。「安泰寺の本当の仏は誰だ」と住職に聞いたら「君だ」と、またとんでもない答えが返ってきました。「君がここで仏にならなければ仏はどこにもいないぞ」と。各々が自分の置かれた場所で仏の行為をすれば仏になれる、キリスト教は人間しか救われないけれど、仏教は生きとし生けるものが仏だと言われています。

安泰寺は檀家を1軒も持たない自給自足のお寺ですので、春は土づくりから作業が始まります。朝晩は座禅、昼間は百姓仕事に専念します。お米、野菜を作って、台所、風呂で使う薪作りもします。山から原木を持ってきて建物も建てたり修復をします。庭も作りました。昔の禅僧が言った「一日作さざれば一日食らわず」という教えが理屈ではなく、身にしみて分かってきます。11月終わりころには初雪が降って、年末が近づくと雪は本堂の屋根に届きそうになります。標高350mですが4mほど雪が積もる時もある、伽藍も人間も雪に埋もれてしまいます。月に1回町まで郵便物を取りに下りますが往復一日かかります。命がけの雪かき作業、11月中旬からは「かまくら」状態です。1部屋だけ薪ストーブを入れています。安泰寺は50ha

の広さで、大阪城公園ぐらいだと思います。春になると自然が私たちに再び力を与えてくれます。

平成3年の春、ベルリンに戻って大学を卒業して、日本で出家得度をすることを決心しました。平成5年、当時の住職に弟子にして頂いて、ようやく一人前の修行僧になりました。修行僧になると当然ながら留学生と扱いが違います。それまで見えてなかった集団の中の秩序、上下関係に気付いて、安泰寺はお前がつくると言われていましたが、みんなと和をもって、集団の中に自分を上手に組み込まなければなりません。自分を型にはめようとしても角が立つ、微妙なズレからコミュニケーションギャップが生じます。最初に一番苦労したのは台所当番でした。朝4時から1人で竈の前に立って料理作りが始まります。毎日叱られて、ある日、「僕は料理をしに日本に来たのではない。仏教を学びにきました」と言うのを、たまたま師匠に聞かされてしまって、「お前なんてどうでもいい」と叱られたのは当然のことかもしれません。禅の考えは勉強だけが修行ではなく、1日24時間の生活がそのまま修行です。その中に「私」という思いを持ちこむと修行ではありません。「私」という思いを忘れて初めて仏になれると言えます。それがなかなか理解できず、むしろ師匠が矛盾していると思ったぐらいです。君が仏だ、君が安泰寺をつくるんだと言ってくれたのに、なんでどうでもいいんだろうと。随分たってから気付いたのは、私が仏と思っている間は仏ではない、安泰寺をつくるんだと思っている間はつくれない。それぞれが「俺の安泰寺」と思っていると、一丸となって一つの集団をつくることはできません。各々が自分を忘れて初めてハーモニーのある一つの安泰寺が誕生するわけです。

平成5年に出家得度をしてから8年、平成13年まで師匠の下で学んだ教えの中で一番重要なことは、「お前が安泰寺をつくるんだ」と同時に「お前なんかどうでもいい」です。平成13年に師匠の下を離れて、ドイツに帰る前に日本で宗教道場をつくろうと思いました。お寺の数は75,000、曹洞宗だけでも15,000ありますが、どこのお寺でも座禅ができるわけではなく、ヨガ教室みたいところで座禅の指導をしたいという思いがありました。大阪に出てみると家賃が高い、道場どころか住むところすら借りられない、たまたま散歩した大阪城公園で出会ったのが沢山のブルーシートでした。私にもこれならできると、見晴しの良いところでテントを建てて、片方で寝泊まりして、片方では6時から座禅をする生活のスタートです。最初は1人でしたが、無料のインターネットカフェでホームページを作って参加者を募集したら増えてきました。12月には立派な小屋まで建ててしまいました。それを許して下さった大阪城公園の管理局の大らかさには感謝しています。詳しく言うと、許してもらったのではなくて、定期的に「告知」が貼られました。他のホームレスの人に「剥がせば1ヵ月は大丈夫」と教わって一安心、座禅の後は参加者にうどんをふるまって、非常に楽し

い生活でした。最低でも2～3年は続けたいと思っていました。

翌年の2月14日、思わぬ訃報が届きました。師匠が除雪中に事故に遭ったという連絡があり、慌てて浜坂に戻って、病院に着いたら、師匠は既に亡くなっていました。私の上には4人のしっかりした日本人の先輩がおられましたが、私と同じように安泰寺を離れて、お寺に入ったり、家庭を持たれたり、すぐには安泰寺に戻れないということです。「君は暇そうだから、まず春まで留守番をしてくれないか」と言われ、正直言うと私は嫌でした。というのは、大阪で10年ぶりに彼女ができて、先輩にそんなことは言えません。彼女に電話して、「帰るのは春になりそう」と言うと「分かった、待っている」と言ってくれました。付き合ってから6週間しかたっていない時のことです。先輩たちが跡継ぎを決めるまでは寺を守ろうと頑張りました。

4月になって師匠の四十九日の日、まだ跡継ぎが決まらない。最後には「外人でもいいからお前がやったらどうだ」と言われた時には「光栄です」と、気が付いたら住職になっていました。当時、まだ可愛かった彼女にプロポーズして、一緒に山寺を継いでくれないうかと言うと、「無理かもしれないけれど頑張ってみる」と言ってくれて、可愛かった彼女、今は強い妻に変身して、毎日、夫婦生活という厳しい修行を味わっています。2人の間には3人の子どもが生まれました。娘は中学1年生、長男は小学校6年生、次男は4歳です。

弟子たちには師匠として接しなければなりません。私が師匠から教わったと同じように、「各々が安泰寺をつくるように、そのためには自分を投げ出すように」と教えています。また、「キュウリのように育ちなさい」とよく言います。安泰寺ではキュウリを1本の紐を垂らして育てています。苗がその紐を掴んで自ら紐に則して伸びていきます。ところが、日本人の弟子に多い気がするのはトマトのような弟子です。1本の紐を垂らただけでは育たない、頑丈な支柱を立てて、紐で誘引しないと、風が吹くと倒れてしまいます。日本人は幼い頃から丁寧に縛られて、社会に入っても丁寧に縛られながら育つことに慣れているようです。欧米人にはカボチャのような人がいます。私もその典型かもしれませんが、カボチャの苗を間違えてキュウリの畝に植えると大変なことになります。素直に真上に伸びずに、あっちこっちにツルを伸ばして「俺が、俺が」と主張し、隣の野菜まで殺してしまうことがあります。そういう弟子も困ってしまいます。どうしてまともな弟子が来ないのか溜息をつきたくなることもあります。師匠の私の見本が悪いからだと思っています。

安泰寺の修行は、まずは各々が安泰寺をつくる、私が仏にならなければ仏はどこにもいない。但し、そこを一步間違えると「俺が仏だ」という天狗になってしまう。「私」という思いを投げ出して自分を投げ出す。座禅においても、私が頑張る座禅をするのではなく、座禅をさせて頂くという気持ちですと、厳しかった

修行がフッと楽になります。あちらの方で求めていた仏が、実は自分の背中を押してくれたという気があったりします。その気があって初めて周りにも優しくなれます。お経の中では生きとし生けるものを我が子のように愛しなさいと書かれています。若い時は自分さえ愛せないのにどうして人を愛せるのかと思っていたものです。宗教の中に自分を投げ出すと、向こうから力を頂いて、向こう側からさせて頂く、生かされている、そういう実感を得て初めて、仏教の中の慈悲の精神、これは仏教における奉仕につながります。観音様はあらゆる形に変身して人のため、世のために尽くしていると言われていました。私たちも親の中に、子供の中に、配偶者の中に観音様に会えることがあるそうです。配偶者から見たら自分が観音様になったり、子供、親から見ても観音様でなければならない、私達も実は観音様の仲間であってはならないというのが仏教の考え方です。

そこで4つの基本的な実践があります。1つはお布施、自分のものを人にあげる、そもそも自分のものという考えを捨てるのが布施です。もう1つは愛語、朝のおはよう、夜のおやすみというのも愛語です。そして利行、自分のことよりも人のことを思う、人のためにすること、仏教的に言うと自他以前のことで私と人を分けずに働くというのが利行です。最後に同事、キリスト教のように上から人を助けるのではなくて、同じ地平線に立って同じ道を歩む、仏教のアプローチで

す。仏教には3つのベクトルのようなものがあります。主役は私、私が仏を実践しなければどこにもいない、そのためには私の思いを捨てて、向こう側からさせて頂く、そして横につながる、一切衆生、生きとし生けるものと一緒に歩むという方針です。

最後になりましたが、安泰寺では色々な国の、色々な年齢の人たちが同じ釜の飯を食い、同じお風呂に入り、同じように田畑で汗を流して暮らして、切磋琢磨しています。ぶつかり合いも多いですが、自分の弱さに気づいたり、生かされていることに気づいたりして学ぶことも多いです。キュウリのような弟子が育つまで守って、いずれは日本で骨を埋めることになると思います。どうか私達を温かい目で見守って頂ければと思います。本日は有難うございました。

